

国際多読教育学会による

多読指導 ガイド



www.erfoundation.org

多読とは、学習者が自分にとってやさしい英語の本を楽しく読んで、読書速度を上げ、読書を流暢にできるようにすることです。多読の目的は、学習者が読解力を高めるのを助けることであり、英語自体の勉強のために本を読むことではありません。多読とは、

辞書無しでも

十分に理解できる 易しい英語の本を

楽しく、速く読む ことです。

速く、流暢に読むためには、読む素材は、やさしいものでなければなりません。(分速150語～200語以上で読めるもの。初級者の場合は、もう少し易しいものから始めてください)* [訳注参照] 1 ページに知らない単語がたくさんあると、読書に伴う目の動きが遅くなり、理解度が低くなります。流暢な読書でなく、「英文読解」のような読みになってしまいます。なお、多読は、英語では、Extensive Reading と表現されるのが普通ですが、Graded Reading (段階別読書) とか、Sustained Silent Reading (持続的な黙読) と表現されることもあります。

* [訳注: 日本の多くの高校・大学生の場合、分速80語～100語からのスタートが現実的です。中学生の場合には、80語以下でもかまいません]

どうして多読なのか？

多読が学習者の言語能力の発達に良い理由はたくさんあります。ここでは、主な6つを紹介します。

1. 学習者は多読によって自然な文脈の中で使われる表現に出会い、言葉が現実にとどのように使われているか、教科書を越えて知ることができます。
2. 多読は語彙を増やします。大量の本を読むことにより数多くの単語や文型に何度も何度も繰り返し出会うため、その使い方が自然に身につく、次にどんな語句や文型が来るのか予測できるようになります。
3. 多読によって、読書の速度が上がり、より流暢に読めるようになります。その結果、[脳内における]言語の処理がより自動化され、脳に他のことを記憶する余裕が生まれます。
4. 多読によって、自信、やる気、楽しさが増し、読むことが好きになります。それによって、学習者は、言語をさらに効果的に使うことができます。また、学習者の言語学習における不安感を下げるのにも役立ちます。
5. 多読では、自分に適切なレベルの英語を大量に読んだり、聞いたりするので、英語の読みや聞き取りのよい習慣が身に付きます。
6. 多読によって英語のセンスが磨かれ、文脈の中で文法がどのように働くのか、勘が養われます。教科書や他の学習教材も文法パターンを教えようとしていますが、様々な文脈の中で十分に出現していないので、文法がどのように使われているか深く理解できるまでにいたらないのです。

国際多読教育学会(ERF)について

国際多読教育学会(the Extensive Reading Foundation、略称ERF)は、多読(ER)をサポートし、推進するための非営利団体です。活動の一つとして、年一回の、英語学習者文学賞(Language Learner Literature Award)の選定があります。この賞は、英語で書かれた英語学習者用段階別読み物(Graded Readers)のうち優秀な作品に対して贈られます。そのほか、多読に関する研究の目録を作成しています。さらに、教育機関における多読プログラムの始動支援として、多読用図書購入資金援助も計画しています。また、多読指導を促進するためのいろいろな支援サービスもおこなっています。この「多読指導ガイド」も、無料でこの団体のウェブサイト(<http://www.erfoundation.org>)からダウンロードできます。

多読と精読

「読み方を学ぶ」と、「学ぶために読む」とには違いがあります。両方とも有効な読み方ですが、違う目的をもって「学ぶために読む」場合、これがいわゆる精読ですが、学習者は、新出語彙、新出文法など、言語そのものについて何かを学ぶためにテキストを読みます。このタイプの読み方は、「学習のための読み」といっても良いでしょう。教科書を読むとき、多くの学習者はこのような読み方をしています。文は短く、学習者の知らない言語要素がたくさん含まれています。たいていの場合、読む前の課題や、読んだあとの課題、理解を確認するための問題が用意されています。このようなタイプの読解の目的は、言語表現を教えたり、題名から文の主題を推測することを教えたり、あるいは、過去形のような文法事項を集中的に学んだりすることです。

一方、「読み方を学ぶ」、つまり多読をしている時には、学習者は、情報を得るための読書によって、読む力を訓練しています。たとえば小説を読む時に、学習をしていると意識せずに、ただ、読書を楽しむために読んでいるのです。多読の目的は、流暢な読書力を育てることです。必ずしも新しいことを学ぶためではなく(多少は学べますが)、すでに知っている知識を深め、それがコミュニケーションにどのように使用されるかという言語のセンスを磨くことです。それによって、学習者の言語処理が早くなり、英文の理解が深まり、読書の楽しさが増すのです。また、学習者が「読み方を学ぶ」のは、読書力や読書方法を身につけることからできますし、理解速度や流暢さを磨くために考案されたスピードリーディングのアクティビティを行ったりすることによってもできます。

精読と多読は、相補的な存在です。精読によって、新しい言語事項を学ぶことができ、一方、多読によって、その新出事項に出会い、より深く知ることができるのです。自動車の運転にたとえると、精読は、自動車学校で運転に関する講義を受けることであり、多読は、路上で実際に運転することであるといえます。多読には、通常、学習用段階別読み物 (Graded Readers) が活用されます。

グレイディッド・リーダーとは?

グレイディッド・リーダー(しばしば、リーダーと略されます)とは、英語学習者が、読書スピードや流暢さを身につけ、読書「そのもの」を楽しむ機会が持てるように書かれた本です。(フィクションもノンフィクションもあります)語学レベルに合わせて、少しずつ難易度が上がっていくように書かれているので、「段階別」読み物と呼ばれています。レベルごとに、物語の複雑さ、文法や語彙、挿絵の量がしっかりコントロールされています。英語母語話者向けの本では、一度か二度しか出てこない語が多いですが、グレイディッド・リーダー (GR) では、出現頻度の少ない語彙は使わず、重要な語彙がひんばんに出てくるよう、出版社がコントロールして、英語学習を助けています。なお、Graded Readers を学校の学年 (grade) 別教科書と混同しないようにしてください。

*[訳注:、英語圏の子ども向けに)創られた英語学習用の段階別読み物でも、重要な語彙が何度もでてくるように工夫されていますが、こちらは、日本では、Leveled Readers (LR) といっていて、GRとは区別しています]

各社の発行するGRのシリーズは、6-8段階にレベル分けされていることが多く、Starter Level (入門レベル) から Advanced Level (上級レベル) まで、各レベルに、ほぼ同じ難易度の本が数十冊用意されています。入門レベルの本は、頻度の高い少量の語句と、最も基本的な文法を使って書かれています。学習者は入門レベルのGRを読むことによって、入門レベルの教科書で習った語彙や文法を補強し、繰り返し触れて学ぶことができます。Elementary Level (初級レベル) では、それより、語彙も文法も難しくなり、ストーリーも少し複雑になり、イラストの数が減り、初級レベルの教科書と対応しています。Intermediate Level (中級レベル) になると、さらに、難しくなっていく。このように、Advanced Level (上級レベル) まで、段階的に難しくなっていきます。このようにして、GRは、学習者がこれまで学習した知識やスキルの上にさらに一段ずつ積み上げて、「ステップアップ」してゆくのに役立ちます。

現在、何千冊ものGRが、世界中の何十もの出版社から入手可能です。広範囲なGR シリーズのリストがExtensive Reading Foundation のウェブサイト (www.erfoundation.org) で入手できます。

グレイディッド・リーダーを読書素材として使う利点とは?

グレイディッド・リーダーを読むことで:

- 理解可能な多くの文や表現にふれることができる
- 読書力を、段階的に、徐々に「ステップアップ」させることができる
- 学習者が読みたくなる興味深い読書素材であるとわかる
- ネイティブレベルの本を読むまでのよい橋渡しになる

多読授業のかたち

ほとんどの多読授業では、学習者は自分のレベルにあった本を自分で選びます。つまり、みんなが別々の本を、そして自分が「楽に読める」本を読むのです。このような読書を、individual reading (各自で行う読書)とか self-selected reading (各自で図書を選ぶ読書)とありますが「持続的黙読」(Sustained Silent Reading, SSR)とか「すべてを中断してとりかかる読書」(Drop Everything and Read, DEAR)ということもあります。学習者は、図書館や多読ライブラリで本を選び、授業内の読書時間に読むか、または家に持ち帰って読みます。(本を選ぶ際、適切なレベルのものを、適度なスピードで読めるように、教師がアドバイスする場合があります)

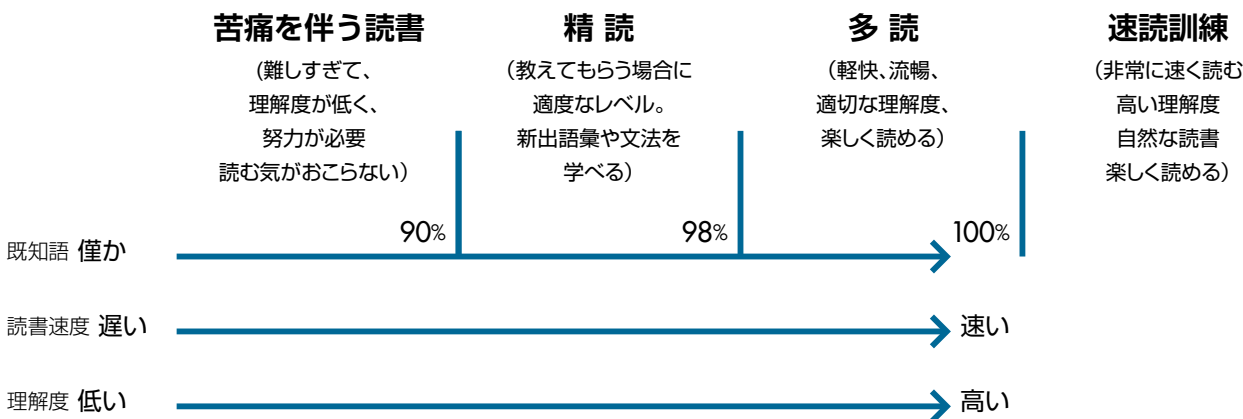
コースによっては、同じ本を授業内で一緒に、一章ずつ数回の授業で読み続けたり、宿題として与えたりする場合があります。このタイプの多読授業では、読書前の準備活動として、学習者に本の内容を予測させたり、内容理解の鍵となるいくつかの単語を教えたりすることがよくあります。読んだ後に、内容理解の質問をしたり、討論やその他の言語活動を行うこともあります。

英語での読書が「多読」であると言えるのは、辞書を使わず、かなり高い理解度で、速く軽快に本を読む時のみです。読書速度が極端に遅い場合には [例えば、分速50語以下]、おそらく学習者は辞書を何度も引きながら読んでいます。このような読書は「多読」とはいいません。

ぴったりのレベルでの読書

多読の効果を得心するためには、学習者は、読む力そのものの訓練を主な目的として、適度な難易度のものを速い速度で読むことが必要です。(分速150語～200語以上。初級者の場合は、もう少し低い数字)*

* [訳注: 日本人学習者の場合、多読の初期は、分速80-120語といった速度で読めるものから始めるのが現実的でしょう]



過去の研究結果によると、学習者が1ページ中の単語を98%知っていれば、速く、そして高い理解度でその本を読むことができると述べられています。既知語が90%未満(10個に1個は未知語)しかない場合、何度も辞書を引く必要が出てきて、読書スピードは遅くなり、読書中にストレスがたまります。その結果内容理解も悪くなります。既知語の割合が90-98%の本は、「教育的レベル」と考えられます。このレベルでは、学習者は、未知語周辺の語句がわかり、内容の大筋を理解できますが、正確に理解したいと思うなら、やはり何度も辞書を引く必要があります。98%以上の語彙がわかる本なら、足を引っ張る未知語が余りないため、速く読むことができ、読書を楽しめるのです。これが、多読の「スイート・スポット」といふべきレベルです。もし学習者が、読んでいるページに出てくる語彙を全部または殆ど知っていれば、非常に速く読めるので、リーディングスピードと自然な読書力向上の訓練として使うことができます。

教師は、リーディングの目的にあった難易度の本を選ぶ必要があります。学習者は、新しいこと[語彙やフレーズ等]を学びたいなら、「教育的レベル」の本を読むのが良く、スピードと、流暢さを向上させたいのなら、「スイート・スポット」の本を読むのがよいのです。あるテキストが「教育的レベル」であるか「スイート・スポット」であるかは、学習者各自の英語能力によります。クラス全員の読書レベルが異なるので、一つのテキストに限定すると、低いレベルの学習者にとっては難しすぎ、高いレベルの学習者には易しすぎる、ということが起こるかもしれません。

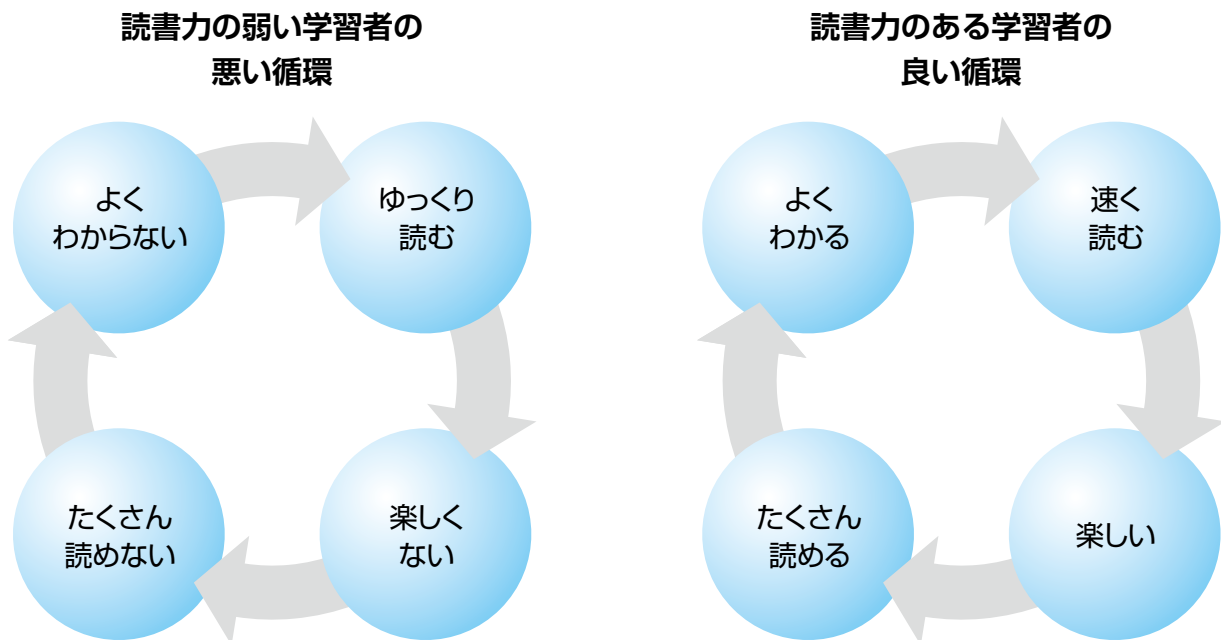
英語母語話者向け図書について

英語母語話者向けの図書は、英語を外国語として学ぶ学習者には、あまり最適な読書教材とは言えないようです。というのは、それらの図書は、英語を母語とする子どもやティーンエイジャー向けに書かれたもので、彼らは読み始める前にすでに何千語もの語彙を持ち、文法もほとんど分かっているからです。外国語として英語を学ぶ学習者は、そのような知識を持っていないので、英語母語話者向けの図書を読むのは、通常とても困難に感じます。*[訳注参照]学習者がこのようなネイティブ向けの本を楽に読めるようになるまでは、グレイディッド・リーダーを読んだ方が良いでしょう。

*[訳注:その困難を克服するために、日本では、SSS英語多読研究会と日本多読学会が協力して、読みやすさレベル(YL)を英語の児童書に設定し、多読授業に活用できるようにしています。GRと児童書の双方を使うと、学習者により魅力的なライブラリとなります。特に、Leveled Readers(LR)とよばれる英語母語話者向けの英語学習用段階別読み物は、文法が制限され、また、同じ語彙を繰り返し使う工夫がされているので、日本人の英語学習に適しています。また、児童書の人気シリーズは、ほぼ同じ難易度の英文で書かれているものが同じシリーズで何十冊もでてるので、多読ライブラリにはそれらもぜひ揃えたいものです]

適切な本の選び方

適切な本を選ぶと、読むことに自信が付いたり、読書力が向上したり、生涯的に英語の読書が好きになることにつながります。一方、不適切な[難しすぎる]本を選ぶと、[理解度が低く、遅くしか読めず、読書が楽しめずに、やる気が下がるという]悪循環に陥ってしまう可能性があります。



従って、学習者が「楽に読める」本、つまり、速く楽に読めて、理解度は高く、楽しみながら読める本を選ぶことが肝心です。どのレベルが楽に読めるか読めないかは、学習者本人しか分からないのですから、適切なレベルを決めるのは学習者自身の判断によることとなります。教師は、学習者が最も楽な、自分にあったレベルの本を読むことを柔軟な気持ちを持って認めなければなりません。ここにおける教師の役割は、どの本が最も適切か、アドバイスすることです。ですから、教師自身が多読用図書をできるだけたくさん読んでいることが重要です。

教師は、学習者がいい加減に本を選んでいないか注意しないとイケません。学習者は:

- タイトルや表紙、イラストだけでなく、本文も少し読んでみる
- 面白い本を選ぶこと。つまらなかつたり、難しすぎた場合には、途中でやめ、別の本を読むこと
- 分速150-200語くらい[多読初期は100語以上]で読める本を選ぶこと
- 辞書なしで読める本を選ぶこと
- 本の内容がほとんど全部理解できることが必要です。

多読授業の準備について

多読授業の実施準備には、時間と責任が必要です。難しいことではありませんが、注意深く行う必要があります。多読授業には、明確な目的と先の見通しがあるべきです。そして、学校と教師の熱意がはっきりと見えるようなプログラムになっているべきです。そのことによって、学習者は読書が重要だと認識するのです。本の紛失や、予算不足による本の不足、そして、「はなばなしく」開始されたときの熱意がしだいに減少していく現実、などを乗り越えてこそ、よい多読プログラムといえるのです。

多読プログラムを成功させるには、理想的には、次のことが必要です。

- 学習者、教師、場合によっては保護者まで、すべての人を巻き込む。
- 時間割に組み込み、カリキュラムの主要部分であることを明らかにする。
- 学習者を、準備や運営にかかわらせる。
- 新しい本を購入するための予算を用意する。
- 学習者に適切なレベルの、楽しい素材を幅広く集める。
- 本の目録作り、分類、貸出、返却、読書記録のシステムを作る。
- 明確な学習目標を設定する。
- 読書を評価する方法を考える。

準備1:多読図書ライブラリを計画する「大きく考えて、小さく始める」のがコツ

「大きく考えて、小さく始める」とは、5年後の多読プログラムのすがたを考えておくということです。多読プログラムは、毎年成長できるように計画しておく必要があります。そのためには、(少なくとも)次のような疑問に対する答えをあらかじめ用意しておかねばなりません。

- 学習者にどれだけの読書量を要求するか、また、どれくらいの頻度で読書を要求するか？
- 授業内読書の時間がとれるか？とれるなら、いつ、どれだけとれるか？
- 学習者の幅広い英語力と興味に応えるためには、どれだけの本が必要か？
- 多読を現在のクラスに取り入れるのか？あるいは、多読のための特別のクラスを作るのか？
- 多読図書をどこに保管するか？また、多読図書の貸出管理をどのように行うか？
- いつ、あるいは、どれ位の頻度で、学習者は、本の借り換えにくるのか？
- 多読図書購入の費用をどうやって捻出するか？
- 誰が、多読プログラムの実行責任者となるのか？

学習者に課外と授業内と両方で読ませることで、読書時間を最大限に確保することができます。教師によっては、授業時間の全部、または一部を授業内読書にあて、学習者の多読を観察できるようにしています。授業内で読書時間が取れない場合、学習者は、家でもどこでも好きなところで読書をすることができます。ただし、授業時間を少しは使うことが必要となるでしょう。学習者が多読図書を借り換えたり、教師が学習者の多読の様子を観察したりする必要があるからです。教師は、多読ライブラリが開いている間、毎日または毎週の一定の時間帯を、学習者が本の借り換えをする時間として決めておく必要があります。一般的に、多読は、まず授業内多読から始めるのがよいでしょう。そうすれば、学習者が本当に多読をしているか、また、適切な多読の仕方を学んでいるかを確認できるからです。そして次第に、課外でも多読ができるようになっていきます。

*[訳注:課外読書だけに切り替えると、読まない学習者が多発しがちなので、授業内読書と授業外読書を最後までうまく組み合わせることをお勧めします]

学習者はどれだけ読むべきなのか？ 教師はどれだけ、本を準備する必要があるのか？

多くの場合、週1冊以上読ませます。次の式は、本が何冊必要かの目安になるでしょう。

(多読クラス数) × (1クラスあたりの学生数) × (一人あたりの図書数) = (必要な本の総数)

例えば、一クラス30人クラス4クラスで多読授業を展開し、各自が、毎週3冊本を必要とするなら、360冊の本が必要となります。各クラスの一斉読書も行なうなら、さらに120冊の本が必要なので、合わせて500冊程度あれば、最低限の多読プログラムが作れます。*[訳注参照]多読ライブラリの本の大半は、平均的学習者が読める本とし、それより高いレベルの本と、低いレベルの本も揃え、すべての参加者に適切な本が用意されるようにするべきです。予算が少ない場合には、一人1冊の本でも構いません。なお、最初に使う図書費は、全体の8割程度とし、残りの2割は、年度の途中で追加購入費として残しておくといよいでしょう。実際に運営してみて、どんな本がさらに必要かわかることが多いからです。

[訳注:易しい本から読み始めるSSS(Start with Simple Stories)方式の多読をとり入れる場合には、最低でもその3倍程度の本が必要となります。また、小中学校で始める場合には、CD付きの本が必須です]

準備2:多読ライブラリの設立 実用的に、現実的に

学習者は、多読ライブラリの利用方法を知る必要があります。多読図書の貸出、返却の仕方などは、すべての学習者によく理解できる簡単で明快なシステムであることが必要です。

多読図書の選択

いろいろな学習者に満足してもらえるように、興味深い図書を幅広く集めることが必要です。国際多読教育学会では、毎年、その年に発行された英語学習者用の graded readers の中から優秀な作品に英語学習者文学賞 (Language Learner Literature Award) を授与しており、その受賞作品リストは、www.erfoundation.org のサイトに公開されているので、それも参考にすると良いでしょう。

[訳注:日本では、『英語多読完全ブックガイド』がコスモピアから出版されており、それが、参考になります]

多読ライブラリに必要なもの

- 学習者の年齢にふさわしいフィクションおよびノンフィクションの graded readers
- 恋愛もの、事件もの、人間ドラマ、サスペンスなど、幅広い話題とジャンルの本
- 各学校の学習者全員のレベルに合う、できるだけ幅広い難易度の本
- 5年後15年後にも学習者が興味を持ちそうな本
- クラスで同じ本を一斉読書する際の、人気作品の人数分セット

[訳注:日本の現状では、英語の読書に慣れていない学習者がほとんどなので、Oxford Reading Tree, I Can Read Books など、非常に易しい英語圏の幼児向けの学習絵本シリーズも揃えた方がよいかもしれません。また、予算に余裕があれば、graded readersだけでなく、英語初級者、中級者も楽に読める児童書や絵本を揃えると、ライブラリが華やかになります]

本の保管場所はいろいろ選べます。

図書館 学校の図書館は、図書の貸出がすでにシステム化されているので、多読図書の保管には最もよい場所です。ただし、本の貸し出しが非常に増えるので、図書館によっては、スペースや人員が足りなくなるかもしれません。

書棚 書棚に本を置いて、教室、あるいは教員室、さらによい例として、多読多聴用の専用ルームで保管するケースも多くみられます。

カート 図書をいれるカートがあると、本を教室から教室へ移動する場合に便利です。複数のクラスで、多読図書を共有して利用する場合、本をいくつかの箱や袋にいれて、複数のクラスで数週間おきに交換しながら利用すると本の種類が増やせます。もし、一斉読書用に同一タイトルのクラスセットがある場合には、その本は、メインライブラリーとは別の場所、または教員室に保管しておくのがよいでしょう。そうしないと、授業前にすでに学習者が読んでいるということが起こりうるからです。

本のレベル分け

Graded readers の出版社は、自社の各リーダーシリーズごとにレベルをつけていますが、各社共通ではないため、指導者が自分でレベル分けをすることが必要です。*[訳注参照] 易しいものから難しいものまで、約6~8段階のレベル分けが必要でしょう。この冊子の最終ページに、国際多読教育学会が作成した、各社のgraded readersのレベル比較表が載っていますので、参考にしてください。色つきのシールやテープを本の背に貼って色分けをすると、本のレベルがわかりやすくなります。例えば、レベル1の本には黄色のシールを、レベル2の本には青のシールを、などのように。または、Level 1, 2, 3のように、数字で表記することもできます。こうすると、学習者が自分に合ったレベルの本を探しやすくなり、教師は本を書棚に戻すのが容易になります。また、貸出カードを1冊1冊の本に用意する必要はありません。簡単な識別番号を1冊1冊の本の表紙の裏に書いておくだけで十分です。例えば、グリーンレベルの25番目の本にG-025と書いておけば、これで、図書を識別することができます。(または、レベル3の67番目の本なら3-067となります)

*[訳注:『英語多読完全ブックガイド』には、SSS英語多読研究会による、独自のレベル評価(YL)がのっています。これは、graded readersだけでなく、絵本や児童書も含んでいます]

貸出システムの整備

貸出の方法については、全く自由なものから、厳格なものまでいろいろな方法がとられています。全く自由なシステムは、誰でもアクセスできる場所においてある多読図書を、学習者がいつでも自由に借り、読み終えた後、自分でそこに戻すというものです。ただしこの方法は、貸出図書が多数紛失しがちであるという欠点があります。最も広く採用されている貸出システムは、もう少し制限をつけたもので、学習者は、毎週一定の時間、本の借出し・返却をするシステムです。2つの簡単な方法を紹介します。

一つは、クラス全体の読書を記録する一枚のリストを作ることです。各学習者は、借りた本のコードを各自の行の、その週の列に記入します。そして、本を返却したら、教師が取消線で消します。学習者がどの本を読んでいるかだけでなく、どのレベルの本を読んでいるかがすぐわかるのがこのリストの利点です。下記の例では、もし、今日が6/7だとすると、このリストから、高瀬さんは、先週までに借りた本はすべて返却していることがわかり、古川君は、5月23日に借りたY-072の本をまだ未返却であり、また、山田さんは、先週休んだということが分かります。*[訳注1参照]

名前	5/23	5/30	6/7	6/14
高瀬 さやか	Y-012	Y-167	G-024		
山田 ゆり	P-034	X	G-024		
古川 雅也	Y-072	Y-059	G-024		

もう一つは、学習者ごとにリストを作ることです。この方法だと、学習者が自分の読書記録を一覧できます。教師にとっても、この学習者が何ページ読んだか、また、グリーンレベル(G-145)から、ブルーレベル(B-023)に上がったことも一目瞭然です。学習者が短いコメントを書く欄も加えてあります。*[訳注2参照]

名前 福本あや 学生番号 12345 クラス: _____

タイトル	本の番号	貸出日	返却日	ページ数	コメント
Kung Fu Kid	G-084	April 13	April 20	16	とても楽しめたけど、ちょっと易しいかな。
I Spy	G-145	April 20	April 27	24	ワクワクして面白い。
Anne of Green Gables	B-023	April 27			

*[訳注1:原文では表の学習者名は外国人のものですが、ここでは日本人名を用いました] *[訳注2:ページ数の代わりに語数を記入させることもあります]

[訳注:読書記録には、市販の読書記録手帳を利用するのも便利です。YLや、シリーズ名、累計総語数を記入できる、「読書記録手帳」が、コスモビア、SEGブックショップから販売されています]

準備3:多読の導入-「段階的に」

多読プログラムがうまくスタートするように、よく準備して導入することが必要です。学習者は、多くの場合、他の授業や、仕事や家庭、(またはそのすべて!)などで忙しくて、課外で読む時間をあまりとれないことがあります。また、英語の本をまるごと一冊読んだ経験がない、または、そもそも読書が嫌いな学習者もたくさんいます。ですから、たとえ多読が学習者本人のためになると分かっている、あまり熱心に本を読まないかも知れません。はじめて多読を行う学習者に、多読をスムーズに導入するために、次の手順をお勧めします。2段階で行います。まず同じクラス用リーダーを用いて一斉に多読を導入し、次に各自で自由に本を選ばせるのです。はじめに学習者を困惑させず、徐々に自分で選べるように導いていくのです。

第1段階 クラス全体での一斉読書

まず、クラスで一斉読書をさせて、多読では長い読み物を読むのだ、ということを経験者にわからせます。クラス中でもっとも学力の低い学習者でも読める本を選んで、クラスで一斉に読ませ、多読とは何かを理解させます。同じ本を、クラスの人数分、少なくとも二人に1冊、用意することが必要です。*[訳注参照] この段階の目的は、易しい本であれば、楽しく、そして速く読めることを実感してもらうことです。多くの場合、学習者は教科書ではもっと難しい英文を読んでいるのですが、それとの違いを、あとで比較できるのです。

*[訳注:全く同じ本でなくても、同じシリーズの同じレベルの本をクラスの人数分用意して、同じように一斉に読書を行うこともできます]

初回の授業

1. 準備しておいた本を学習者に見せます。本をよく見るようにいいます。本の特徴を言わせてもよいし、どんなストーリーの本なのかを予測させてもよいでしょう。
2. あらかじめ、決めておいた部分まで(例えば、第1章の最後まで)を黙読させます。本を閉じて、先生に渡します。(本を読む代わりに、CDの音読を聞きながら黙読させるのも良い方法です)
3. 「登場人物は誰か?」「場所はどこか?」「何が起こったか?」「次に何が起こりそうか?」のような簡単な質問を黒板に書きます。(日本語でもかまいません)
4. ペアで考えて答えさせ、あとでそれを発表させます。

2回目の授業

5. 学習者に、前回に読んだストーリーを思い出して、次の何がおこるか予測させます。
6. また、数ページをクラス全体で、初回と同じように読み、質問に答えてさせます。

3回目以降の 授業

7. 本を読み終えるまで、あと2, 3回の授業でこの作業を続けます。
8. すべて読み終わった後、感想を聞きます。また、この読み物が教科書の英文とどう違うかを聞きます。
9. 多読の目的は、英語の学習をすることでなく、読む実践をして、読解の速度を上げることであり、簡単な英語であるからこそ、それができることを説明します。本の中の語彙や文法事項をほとんど知っていたとしても、読む訓練になり、読解速度が上がるので、多読でしっかり学べるのだと強調する必要があるかもしれません。

学習者が易しい英文を読むことに慣れるまで、何冊かで、同じようなことをしてみてください。

[訳注:ここでは、ある程度長い本を使って、多読的読み方に慣れることを想定していますが、非常に短い本をたくさん使って、多読を導入する方法もあります。これについては、『英語多読多読指導マニュアル』(高瀬敦子、大修館)『英語多読法』(古川昭夫、小学館)を参照ください]

第2段階 学習者が自分で図書を選ぶ

クラスの一斉読書で易しい本を読むことに慣れてきたら、学習者が自分で本を選ぶ多読に移行しましょう。

Stage 1 - オリエンテーション

どうして多読が重要なのかを、学習者によく説明しましょう。教科書の勉強と多読は英語学習の両輪であることを強調し、楽しんで読むことは、教科書で習った言語を学習者が実際に使ってみる機会であることを再度説明しましょう。

Stage 2 - 最初の1冊を選ぶ

多読ライブラリから最もやさしい本を選んで机の上に並べ、学習者に全部ざっと見てもらい、読みたい本ならどの本を選んでも良いが、自分が楽に読めるレベルの本でなければいけないことを説明してください。4ページを参照のこと。

この早い段階で、図書の分類システムについて説明しておく:

- 多読図書がどのようにレベル分けされているか(色によるレベル分け、数字によるレベル分け、など)
- 多読図書の分類に用いられている数字や記号の意味
- 多読図書の借り出しと返却の方法
- 学習者がどのレベルの本を読むべきかをきめる方法

学習者が自分のレベルを決めて、最初の1冊を選んだら、クラス内で10-15分の黙読時間を設けてそれを読んでもらいます。その間に、教師が、「本はどう?」「レベルはちょうど良い?」「読みやすい?」「楽しい?」「理解できてる?」など、小さい声で質問をして回ります。もし、本が不適切な場合には、別の本に替えるように指示します。

そして、その本の借り出し手続きをするように指示し、その本を毎回の授業に持ってくるように伝えます。(授業の最後または最初の何分かを黙読の時間として活用することができます)

[訳注:最近では、1時間限るまる多読にあてる学校や、30分以上を教室内多読にあてる学校も増えて来ました。その場合には、それぞれのケースに応じて、貸し出し、返却、授業内での読ませ方、などのシステムを工夫してください]

Stage 3 - 課外読書

学習者が何冊かを授業内で読んだ後、課外でも読むことが必要だと伝えましょう。最初は、1週間に20分といった非常に短い時間でも構いません。毎週少しずつ読む量を増やしてゆき、1学期または1学年のうちに、1週間に1冊読むペースまで到達させましょう。

[訳注:課外読書は、学習者に強い動機が無いとうまくいきません。宿題を強制して、評価に入れることもできますが、そうすると、読書記録の「偽造」を行う学習者が出てきたりします。成功している多読クラスでも、全員が課外で毎週ある程度の量を読むとは限りません。そこで、多読で効果を上げるには、授業内多読の時間をしっかりと確保し、読書に慣らし、じっくり読む習慣をつけ、課外でも自主的に読むようになるまで、毎週読書記録手帳を見るなどして、刺激を与え続ける必要があります]

1冊本を読んだ後、学習者がすべきこと

- ほかの学生と本について話し合う、または読書後の活動(13-15ページ参照)を行う
- 本を「返却ボックス」(あるいは所定の場所や、先生)に返却し、別の本を借りる
- 先生が返却手続を行ったり、本を所定の場所に戻したりするのを手伝う

多読の評価

教師は、学習者の読書の理解度を、テストや小テストで直接確かめたい、あるいは、せめて実際に読んだかどうかだけでも確かめたい、と思いがちです。しかし、多読においては、学習者が自分に適切なレベルの本を読んでいる限り、理解度をチェックする必要はありません。本を選択する際に、内容をほぼ全部理解できる本だ、と確信して選ばせているからです。多読は、そもそもテストには馴染みません。多読は、学習者が読書速度を上げ、流暢な読みを学び、自信をもって英語が読めるようになるためのものです。このような力は、必ずしも、テストで直接評価できるものではありません。しかし、公教育機関では、多読に関する成績評価を要求することが多いと思います。この実情を考えると、このセクションでは、多読の評価について、いくつかのアイデアを提示します。

Graded readersのオンラインテスト

学習者が実際に本を読んだかどうかを教師は知りたいものです。それを知るための一つの方法は、読書後にテストをすることです。しかし、多読では、各自が別の本を読んでいるので、テストを行うのは難しいことです。国際多読教育学会のウェブサイトには、そのようなテストを可能にするオンラインテストのシステムが用意されています。教師は、アカウントを作り、学習者にログイン名とパスワードを用意します。学習者は、このシステムに各自でログインし、読んでいる本を選び、オンラインテストを受けると、合格か不合格かすぐに通知されます。教師は、学習者がどれだけの本を、また、どの本を読んだか、そしてオンラインテストに合格したかどうかを知ることができます。また、学習者は、オンライン上で、読んだ本の表紙を「スタンプ収集」の感覚で集めることができるので、読む気が起こります。詳しくは、www.erfoundation.org/assessment.html を参照ください。

[訳注: 頻繁な読書後の理解度チェックテストは、学習者が自発的に読む動機をかえってそぐとあって、強く反対している人もいます。反対論者の代表的意見は、<http://archive.mag2.com/0000118505/2011090807000000.html> を参照下さい]

間接的な評価

1. ブックレポート、要約、口頭発表、ポスターでの発表

学習者に、ブックレポートや要約提出・口頭で要約・ポスター制作・口頭発表などの課題を出して、本を読んだかどうか把握することもできます。主要登場人物やあらすじの説明、それについての感想を書かせるのも良いでしょう。学習者の英語力が低いときは、“My favorite character was _____, because _____” とか、“I (didn't) like this book because _____” のような文章の穴埋めをさせたり、感想を日本語で書かせるのも良い方法です。

2. 成績評点

学習者の読書ページ数や語数、graded reader のレベルがどれ位上がったか、口頭あるいは書かれた要約の正確さ、多読に関連するアクティビティでの反応などに対して成績評点をつけることができます。

3. 読書速度測定

学期の最初に、学習者に適切なレベルの本を3分間読むように指示し、その語数を数えさせ、それを3で割って、読書の分速 (word per minute. wpm) を計算させます。同じ作業を、多読プログラムの中間、および最終回に行ない、その変化をみましょう。もちろん、毎週行なっても構いません。グラフにして進歩を記録したい学習者もいるかもしれません。

4. 日常的な観察

毎週、授業中の黙読時間に、学習者を観察することができます。

- 理解して読んでいるように見えますか？ 退屈そうだったり、興味を失ったりしていませんか？
- おかしい場面で思わずニンマリしたり、ハラハラする場面で、心配そうな表情をしていますか？
- 楽しそうに本を読んでいるような姿勢ですか？ それとも、寝ているのを隠すような姿勢ですか？
- ページを頻繁にめくっていますか？ 読書速度が遅いように見受けられますか？ (たとえば指でなぞって読んでいるなど)
- 何度も同じ所を読んでいませんか？ 辞書を頻繁に引いていませんか？

5. 読書中または読書後の口頭による日常的な理解度チェック

学習者に次のような質問をすることによって、ちゃんと理解できたか、あるいは、本を読み終えたかを知ることができます。

- あらすじを問題なく言えますか？ これは日本語でないと聞えないかもしれません。
- 本のどこが好きで、どの部分が好きでなかったか、すぐに言えますか？
- ストーリーの要となるセリフを探し、誰がそれを言ったのか、登場人物が訪れた場所はどこか、などを言わせましょう。
- 「これは何のこと？」「主要登場人物は誰？」「このページで何がおこった？」などと聞いて見ましょう。
- どのような終わり方だったか聞いてみましょう。「悲しい結末だったか、ハッピーエンドだったか？」「それはどうしてか？」「この本のジャンルは？」などと聞いて見ましょう。
- 質問に応えるとき、本を開いて答えを探しているか観察しましょう。

多読についての Q&A 多読について教師から多く寄せられる質問に回答します。

学習者が自発的に読むのであれば、教師の役割は何なのでしょう？

教師が直接英語を教えていないからといって、学習がストップしているわけではありません。学習者が授業中に黙読している間、教師は、一人一人と小声で対話し、適切なレベルの本を読んでいるか、本を楽しんで読んでいるか、読み終わったか、などをチェックします。教師もその時間に英語で読書し、お手本を示すこともできます。

学習者が読まないのはどんなときでしょうか？

多くの理由が考えられます。

- 読んでいる本が難しすぎたり、自分にとって興味の無い本だったりする。
- 他の授業からの宿題などで忙しい。
- 読書が苦手である。読むよりも、CDなどの音声を手軽に聞く方が好きな学習者もいる。
- 多読がオプションなので、多読をやらなかった。多読は必修にするべきです。
- 学習者が実際に読んでいるかどうか、教師が定期的にチェックしなかったため、学習者が多読しなくなった。
- 学習者の多読への動機付けが十分になされていない。

どれだけの量を読ませるべきでしょうか？

過去の研究結果によれば、学習者は、自分に適切なレベルの本を1週間に1冊以上読むべきです。

みんな忙しくて余裕がありません。カリキュラムに導入する時間が無い場合、どうすればよいのでしょうか？

学校や教師が、多読をカリキュラムに入れられないという選択肢もあります。しかし、全く入れないと、学習者は、

- 実際に読むという訓練が十分にできず、読書速度を上げられません。
- 教科書の文法や語彙を深く定着させるのに必要な英語の量を確保できません。
- 流暢に読める爽快感・達成感を感じることができません。

ですから、学校は、カリキュラムを変えて、多読を語学カリキュラムの基本的部分に取り入れることを考えるべきでしょう。

試験に合格させる授業をしなければいけない場合、多読はどのように行なうべきですか？

多くの学習者が、TOEIC、TOEFLのような標準テストで低い得点しか取れない主な理由は、問題を速く読めない、最後までやりきることができないことです。もし、学習者が流暢に読めるならば、テストの問題文も速く読めることになり、理解度も高くなります。テスト勉強のための問題集で、短文ばかり読んでも、流暢に読めるようになるのに十分な量を読めません。多読する学習者の方が、同じ時間をかけてテスト勉強をする学習者より、テストの得点が伸びると研究結果は示しています。

難しすぎる本を読むのをやめようとしませんか。どうすればよいのでしょうか？

学習者が十分な背景知識を持っていて、楽しんで読んでいるのなら、心配することはありません。難易度の高い本が問題となるのは、読書に疲れて、だんだん読む気が失せる場合です。そんな場合には、学習者に読むのを中断するよう指示し、もっと英語力がついてからもう一度読み始めるようアドバイスしましょう。

多読を必修にすべきでしょうか、それとも、自発的に読むよう指示すべきでしょうか？

理想的には、自発的に読んでもらうのがよいのですが、たとえ頭ではそれが良いと分かっているとしても、学習者は忙しく、まず読もうとしないでしょう。もし多読が必修でなく、選択するものなら、多くの学習者は選択しないでしょう。教師は、多読がなぜ必要か、どのように役立つかを学習者に説明し、多読をオプションでなく、履修コースの一部として学習者に提示すべきです。

読む時間を見つけるには？

ほとんどの人は毎日の生活に隙間時間があるので、それを使って読むように指導します。授業中に多読を行わない場合、学習者は毎日決まった時間を見つけることが必要です。たとえば、夜寝る前、通学バスの中など。

[訳注:バスの中は、目が悪くなるといけないので、あまりお勧めできません。バスの待ち時間を活用しましょう。電車の中で読む人は多く、これはあまり問題ないようです]

どの学年からgraded readersを利用した多読が可能ですか？

学習者が自分一人で多読できるようになるには、アルファベットの文字に慣れ、最低100語くらいの基本単語を認識でき、最小限の基本文法が分かっていることが必要です。Graded readers の最も易しいものは、非常にやさしいレベルから始まっているので、かなり早い段階から、多読は可能です。(16頁の表を参照ください) 英語では、綴りと発音が必ずしも一致していないので、フォニックスの学習は非常に有益で、学習者によっては必ず必要な場合もあります。

[訳注:leveled readers と呼ばれる、英語圏の幼児用の段階別学習絵本で、CD付きのものから始めれば、小学生や、英語が全く初めての中学1年生でも、多読を開始することは可能です。正しい英文をたくさんインプットすれば、おのずと正しい文章を習得します。その場合は、(中学生ならば)ある程度英文を吸収したところで、基礎文法をまとめて説明すると納得がいくでしょう]

学習者は、多読するときに、辞書を引いてもよいのでしょうか？

読書速度を上げ、流暢な読み方を身に付けるために読む際には、学習者は、やさしくて楽しい本を読む必要があります。もし頻繁に単語を調べているようなら、おそらく読んでいる本が難しすぎるので、もっとやさしい本を読んだほうがよいでしょう。

学習者は、音読するのがよいのでしょうか？

教師は、時々、音読してあげるとよいでしょう。それによって学習者は、音と綴りを結びつけることができ、文レベルの発音(イントネーション、リズム、強弱)の感じがつかめます。音読するのが苦手な場合には、本に付属しているCDを利用するのが良いでしょう。読書速度は、リスニングの速度(=朗読速度)より速いので、聴きながら読むことには利点があるものの、聴き読みには、あまり時間をかけるべきではありません。*[訳注参照]なお、教室での音読は、発音に自信がなく、恥ずかしがる学習者が多いので、学習者には好まれないことが多いです。また、音読しながら、内容について考えるのはとても難しい作業であり、音読は遅く、単調になりがちです。ですので、音読で良い結果を出すには、十分な訓練が必要です。

[訳注:これは、年齢や英語の学習経験にもよります。読書速度が、朗読速度より遅い英語の初心者の場合には、長時間の聴き読みはお勧めです]

学習者に訳すよう指示を出してもよいですか？

多読で最も重要なことは、学習者が速く、高い理解度で読めるやさしい本を選ぶことです。このことによって、学習者は、言語処理を速くでき、英語のまま無意識で理解できるようになるのです。もし、日本語に訳すように言われると、その度に、日本語での思考にもどらなければならない、英語のまま無意識で理解する力を伸ばす妨げになります。英文が相当難しい精読の場合には、和訳することで原文の意味の理解の助けになる場合もあります。

流暢さを身につけるは、graded readers のみ使うべきですか？

その必要はありません。学習者は、速く流暢に読めるものであれば、どんなものを読んでもかまいません。しかし、最近の研究によると、graded readers と一般書*[訳注参照]を併用して読んでいる学習者より、graded readers のみを読んでいる学習者の方が fluency の伸びが大きいという結果が出ています。読書速度を向上させるコースは、成功率が高く、多読と並行して行うのにはとても良いコースです。

[訳注:一般書といっても、児童書の一般書は、装丁、イラスト、内容の多様さにおいて、学習者に魅力的なものが多くあります。graded readers を多読の素材の中心としつつも、読みやすさで定評のある一般児童書や、英語圏の児童用の段階別読み物 leveled readers も多読ライブラリに付け加えてみてはどうでしょうか]

本が「行方不明」です。どうすればよいのでしょうか？

本、特に一番人気のある本が「行方不明」というのは、よくあることです。ですから、本は複数冊用意しておいたほうがよいでしょう。しかし、本が無くなるからといって、学習者が自分のものにしていくということでは必ずしもありません。本をなくしたり、返し忘れていたりしているのに、それを正直に言えないという場合が多いのです。教員室の前に多読図書返却ボックスを用意し、そこにいつでも本を返せることを周知させるとよいでしょう。

保護者も多読に関わってもらうべきですか？

学習者が本を家に持って帰ることは、わが子の学習に学校が真剣に取り組んでいる、というメッセージを保護者に伝える、すばらしい方法です。低年齢の学習者の場合、家で親と一緒に本を読んだり、親に読んでみせることは、非常に良い方法です。毎日、あるいは、毎週決まった時間(就寝前、夕食後など)に、親と、あるいは、兄や姉との読書時間を作ることは、読書の習慣をさらに強めます。学校の中には、学習者が本を理解したか、保護者に頼んで簡単な用紙に記入してもらうところもあります。これには、学校と家庭の連絡を密にする効果もあります。

どうしたら、学習者の読みたい気持ちをずっと保てるのでしょうか？

動機を高く保つことは、多読プログラムの成功の鍵です。いくつかのヒントを挙げます。

- 学習者にリーディングパートナーを与え、読書の楽しみや、問題点などの経験を共有させましょう。
- 一番たくさん読んだ賞、最優秀ブックレポート賞、読書速度向上賞などの、賞を設定しましょう。
- 学習者に、本の購入の手伝いや、貸出の手伝いを依頼しましょう。
- 学習者に、図書館の飾りつけや、本のディスプレイのアイデアを出させましょう。
- 学習者に投票させて、図書館の人気ベスト10の本を発表しましょう。

[訳注:ほかに、「新しい本を購入し紹介する」、「多読で英語力が伸びた先輩の話を書く機会を作る」、「多読を楽しんでいる社会人に、多読の必要性、楽しみを語ってもらう」、「知人の外国人に、英語で、読書の楽しみを語ってもらう」、「外部の著名人に講演してもらう」、「英語学習誌などの多読特集を紹介する」などが、日本の各地で実践されています]

多聴-音声とビデオの利用について

多聴 (Extensive Listening) と多読 (Extensive Reading) は、姉妹のような関係です。学習者は、流暢に読めるようになるだけでなく、流暢に聴けるようになることが必要だからです。英語の音声認識を自動化し、英文理解のセンスを磨くには、多聴による英語のインプットが必要です。また、読むのが苦手な学習者もいるので、教師は多聴の機会も用意すべきです。

Graded readers には、CD付きのものが多数あります。出版社のサイトから無料でダウンロードできるものもあれば、別売になっているものもあります。シリーズによっては graded readers にビデオが付いているものもあります。通常、録音の質はとて高く、学習者が音声聞きながら本を読み、楽しむことができます。録音された音声は、リズム、イントネーション、発音の認識を助けますし、自分が音読や発話をする際の良いお手本となります。

多くの学校では、本とCDをパックにいれるか、本の裏側にポケットをつけてCDを入れるなどし、学習者は、(a)ただ単に読む、(b)ただ聴く、(c)聴きながら読む のいずれかを選べるようにしています。また、1回目は読み、2回目は聴く、とか、その逆に、1回目を聴き、2回目は読む、などの使い方もできます。

[訳注:奇数章を聴き読みし、偶数章は聴くだけにする、というもお勧めです]

教師も学習者も、流暢に読む能力と流暢に聴く能力が必ずしも一致していないことに注意すべきです。研究によれば、多くの場合、聴いて分かる語彙の量や、語彙へのアクセス速度は、読んで分かる語彙よりはるかに低いのです。(1/4から1/2程度といわれています) ですから、本のリスニングでは、読解力より1~2段階低いものを利用する必要があるかもしれません。各学習者が、流暢に聞ける自分のレベルを見つけられるように、いろいろなレベルの本の録音を少しずつ教室で聴かせると良いでしょう。学習者は、一番簡単なレベルの本から順番に聴いてゆき、ちょうど快適なリスニングレベルに出会ったらメモします。

[訳注:音声については、語彙の難易度だけでなく、朗読速度の速さの問題があります。同じ語彙レベルでも、朗読速度の速さによって、聴きやすさは異なります。また、ある程度多読して、読書速度が上がっている学習者の場合、その本のCDの朗読速度が遅すぎるという場合も少なくありません。そこで、教師の方も、各録音の朗読速度をあらかじめ調べ、適切に、学習者を指導する必要があります]

多くの最新のCDプレーヤーやミュージックプレーヤーは、朗読が学習者にとって速すぎる場合、再生スピードを遅くすることができます。*[訳注参照] また、無料のコンピュータソフトがWeb上で提供されているので、ダウンロードして、(著作権の問題がなければ)朗読を編集し、速度を遅くしたり、または速くしたり(リスニングスピードを伸ばすのに効果的)することが可能です。このソフトは、ネットで簡単に検索できます。

[訳注:日本ではCDプレーヤーで速度が調整できるのは、ソニーの語学専用機種のみです]

Graded readers の朗読音声を最大に利用するためのヒント

- 録音を毎回または毎週、数ページずつ聴かせ、連続ドラマ風の授業を行いましょう。
- 劇の台本となっている graded readers は、リスニングだけでなく、実際に、学習者に劇を行わせるのにも役立ちます。
- 学習者が1冊読み終わった後、ノンストップで、文字を見ずに、リスニングだけで最後まで聴かせてみましょう。このことによって、リスニングの流暢さを増すことができます。もっと聞き取りやすくするには、文字の部分を隠して、挿絵や写真だけを見ながら聴くようにさせるとよいでしょう。
- 発音訓練のためには、次のような方法があります。会話になっている部分を選びます。そして、一文のあとで一時的に停止し、リピートさせます。もう一度再生して、同じ文をリピートさせます。これは個別でなく、クラス全体でおこなってください。
- 本のイラスト部分をコピーし、それを切って学習者に配り、リスニングしながら、イラストを順番に並べさせます。
- まず、ざっと聴かせて大意をつかませ、次に、細部を理解させるために、もう一度聴かせましょう。
- 一人の学習者には、本をリスニングさせ、また、別の学習者には、本を読ませて、お互いの理解を比較させます。
- 教師は、本の一部をわざと間違えながら音読します。学習者は、本を黙読しながら聞いて、間違いを訂正します。

多読授業のいろいろな活動アイデア

多読授業の初日

学習者の読書の履歴を調べましょう。どんな本を読んでいるのか？日本語の本を読むのと、英語の本を読むのとでは、どのような違いや共通点があるのか？実際に、読んでいる英語の本や日本語の本のサンプルを持ってきてもらいましょう。学習者の読書に対する考えを話し合ってもらいましょう。「ゆっくり注意深く読むのと、速く読むのとどっちが良いか？」「本の内容をすべて理解するべきか？」「辞書を引いてもよいか？」「どんな場所で読書するのが一番いいか？」「読む本を決めるのは誰か？」など。

本や読書素材を選ぶとき

本の特徴、裏表紙などの出版社の推薦文、語彙説明、理解度確認部分、などを教師が指摘します。

多くの本を机の上に置き、どの本の表紙が一番良いか、どの本に興味を惹かれるかを学習者が話し合います。

「本探し」をしてみましょう。教師が問題をつくって、本をあてさせます。(問題例)「どの本に、5話収録されているか？」

「MariaとFelixが主人公のラブストーリーはどれか？」「著者David Andrewが書いた本はどれか？」

何冊かの本からイラストをコピーし、どの本のものかを当てさせ、その理由を聞きます。

題名と表紙、イラストから、ストーリーを予測させます。いつ、どこで起こる話か、主人公はどんな人物なのか、など。

表紙と出版社の推薦文を見て、学習者が読書前にストーリーに関する問題を作ります。そして、自分で作った問題に答えるために、その本を読みます。

「私のお気に入りの1冊」に関する話し合いをさせると、他の学習者が良い本を選ぶ参考になります。もっとも人気ある作品には、表紙に星マークをつけたり、「もっとも読まれた本」とか「クラスのお気に入り」などのラベルを貼っても良いでしょう。

学習者も関わらせるには

学習者に本のジャンル分けをしてもらい、本の表紙内側にその情報を書いてもらいましょう。

出版社のカatalogから、新規購入の本を学習者に選ばせましょう。

近頃の公共図書館に行くよう、学習者に依頼し、多読用の良い本があれば「おすすめ図書」としてクラスに紹介してもらいましょう。

「図書モニター」として、貸出や本の整理、陳列を手伝ってもらいましょう。

読み終わった本を寄付してもらいましょう。本の表紙内側に、〇〇寄贈(〇年〇月〇日)と書いてもらいましょう。

図書購入の資金集めを学習者に手伝ってもらいましょう。読書マラソンを催したり、寄付の依頼をしてもらったり、学園祭のバザーで物を売ってもらったり、など。

ある本のレベルが、そのレベルの平均的な本より難しいか、易しいかを、学習者に読んで判定してもらいます。必要があれば、教師がレベルを変更します。

本の書評やおすすめ図書の情報を載せた、クラスまたは学校のブログやホームページを作るよう、学習者に依頼します。

読者用「書評カード」を、表紙の内側につけ、学習者に星や笑顔マークで評価してもらいます。

学習者に、今学期のベスト10を投票させます。

学校内のどこかに多読ラウンジを作る際、学習者にも手伝わせます。

学習者に、図書の「ジャンル」陳列をしてもらいます。ホラーの特集陳列とか、恋愛ものの陳列など。

学園祭で、読書マラソンを開催します。学習者達は、例えば、8時間といった時間を設定して、読書量を競います。異なった長さや難易度の本に、3kmとか5kmとかの距離を決めます。マラソンと同じ42km分の本を読まねばなりません。学園祭に参加している人達にスポンサーになってもらい、読書マラソンランナーが1冊読んだら100円、あるいは、1000語読んだら100円といった寄付を求め、そのお金を本の購入に使うこともできます。

学校で、「読書クラブ」や、「読書コーナー」を始めてみましょう。

[訳注:上記の活動は参考ですから、クラスの状態に応じて無理のない程度に行ないましょう]

流暢に読めるためには

同じ文章をもう一度、しかし、10%速く読ませます。

時計を見ながら読ませます。例えば、3分間に、××語を読むように学生に指示します。

本の一部を、ペアで速読み競争させます。(ただし、内容を理解しながら)

学習者が読み進めながら感想を記録し、その後、もう一度同じ話を読み、感想が変わったかを調べます。

クラス全員が同じ物語を一斉に読むとき

その本が映画や有名な古典の場合には、読書にはいる前に、映画の予告編を教室で上映します。

有名な物語の場合、その本について、著者、あらすじなど、すでに知っていることを聞きます。例えば、ロミオとジュリエット、ジェーン・エア、ジャングルブック、シェイクスピアやチャールズ・ディケンズの作品など。

学習者に同じ本を読ませ、いろいろ異なる課題を与えます。ある学習者には、語彙や句を見つけさせ、別の学習者には、登場人物についてメモさせたり、あらすじを記録させたり、文化的要素を調べたりさせます。そして、お互いに比べさせます。10の質問。一人の学習者が、物語の中から、ある登場人物、またはある場所を選びます。他の学習者たちは、Yes/Noで答えられる質問をするだけで、答えを当てます。Are you old? Do you have a sister? のように。10個の質問で、当てなければなりません。一つの章を読んだ後に、教師が幾つかのtrue/false問題を出します。クラスの中で、一番正解の多かったチームが勝ちます。本のある部分を使って、登場人物の性格や口調をまねて、学習者がロールプレイをします。セリフは自分で作っても、本のあるものをそのまま使ってもかまいません。みんなの前で演じてもらうのも良い方法です。

登場人物達と同じ感情で、学習者にあるシーンを演じてもらいます。(感情的なシーンを逆の口調で演じてもらうと、面白くて盛り上がります。たとえば、ロマンチックな場面を興奮した口調で言うとか、悲しい場面を楽しい口調で言う、など) ある重要なポイントで読書を中断させ、登場人物にどんな音が聞こえるか、何を見たり、どんな臭いを嗅いでいる可能性があるかを想像させます。

各登場人物に、どんなプレゼント、罰、乗用車、食べ物、服装、家庭などを与えるとぴったりか、について学習者が話し合います。ある章の一部を読ませ、あるいは、演じさせ、そして、中断させます。そして、次に何がおこるかを考えさせます。

教師が重要な文章を取り出します。そして、それを誰が言ったのか、なぜそう言ったのか、を言わせたりします。

本を読み終えたとき、題名、本の挿絵、表紙が物語にあっていようかどうかを話し合かせます。

教師が、物語の順に一行文で要約を書きます。一行ごとに切断し、並べ替え、再度、物語の順に並べ替えさせます。

ノンフィクションの本の場合には、本にでてきた場所(人々、国、会社など)について調べさせます。

読書後、映画(もしあれば)を見せ、本と映画の違いについて、話し合かせます。

イラストや写真、あるいは、章のタイトルをコピーし、それを正しい順番に並べさせたり、それをもとに、話を再現させたりします。

物語の登場人物を描写する形容詞(daring, stubborn など)のリストを与え、それが誰であるかを当てさせます。

物語が終わったあとどうなるのか、予測させます。または、物語の続きのあらすじを書かせます。

読書後、学習者が登場人物の一人になりきり、インタビューを受けます。特に、犯罪小説のときに使えます。

学習者が、本の中の出来事を時間軸にそって書きます。特に、回想の多い物語には有効です。

本の情報を、地図、グラフ、図表で表現させます。特に、ノンフィクションの場合に有効です。

同じ話の一部(または全部)を、別の登場人物の視点から、書き直させるか、口頭で言わせます。

重要な場面を分析させ、もし、学習者が、同じ状況にいたら、同じことをしたかどうかを考えさせます。

登場人物のプロフィールを作らせます。クセ、趣味、食べ物、仕事、服装など。

いす取りゲーム。いすを円形に並べ、一人を除く全員が円の中心に向いて座ります。一人が中央に立ち、"If you know the main character's name, change chairs." (主人公の名前を知っている人は、席を替わってください)などと言います。該当する学習者は、空いている椅子に向かって走ります。一人残った人が、"If you read book xyz, change chairs." などと繰り返します。学習者がリレー方式で、物語を再現します。例えば、一人目の学習者が、最初に起こった出来事を、一文で言います。次の人が、次に起こった出来事をまた、一文で言います。それを次々に続けていきます。

情報の共有

学習者が、4分間でペアの相手に物語のあら筋を伝えます。次に、ほかの人に3分間で伝えます。そして3番目の人には2分間で伝えます。

ポスターを貼ったり、展示をしたり、書評を壁に貼ったりして、楽しい多読ライブラリーにします。

多読ライブラリーの本を全部見させます。各学習者に今学期の読書予定リストを作らせます。そして、その情報を共有させます。

ライブラリーに、誰が、どの位のページ数(訳注:あるいは語数)を読んだかを示すグラフを張り出します。

学習者が、この一週間、または一学期中に読んだものの「記録」をつけます。教科書や、リーダーや、道路の標識や、ポスターや、広告など、読んだものすべてを記録します。そして、その内容を他の学習者と話し合います。

学習者は、読んだ物語が自分自身の生活とどう関係しているか、あるいは、関係していないかを言います。

物語の内容を、学習者自身の言葉で言わせます。そして、それを聞いていた別の学習者は、それに対して2つの質問をします。

別々の出版社から出ている同じタイトルのリーダー(例えば、*Jane Eyre*)を読ませ、どこが同じで、どこが違うかを比較させます。

学期の最終日に、クラスで読んだリーダーについてのアンケートを行います。

Writing

学習者は:

読んだ物語とは違うエンディングを書きます。あるいは、本の一部を、映画の台本として書き直します。

ある登場人物の日記であるかのように、物語を再現します。

物語についての短い詩、あるいは、ある登場人物から別の登場人物への詩を作ります。特に、恋愛小説の場合には、有効です。

物語の舞台となる場所の地図を作り、道順をたどりながら、何がどこで起こったのか、解説を書きます。

登場人物達と自分達を比べます。似ているのは誰でしょう。似ていないのは誰でしょう。

クラスのクイズを作ります。「誰が何を言ったか？」など、物語のいろいろな要素を用いて。

ある登場人物の、架空の一日についての物語を書きます。

ある登場人物への手紙またはemailを書きます。

登場人物紹介をします。優れた点や弱い点、習慣的行動、経歴などについて書きます。

一つか二つの場面についてイラストを描き、それがどんな場面かを書きます。本のイラストをそのまま描いてはいけません。

物語の要約を書きます。一つの出来事を、1行で表します。切り取ってバラバラにし、正しい順番に並べ替えます。

本の感想を書いて出版社や著者に送ります。

多読に関する資料について

本および論文(英文)

Day, R. and J. Bamford, 1998, Extensive Reading in the Second Language Classroom, Cambridge University Press.

Day, R. and J. Bamford, 2004, Extensive Reading Activities for Teaching Language, Cambridge University Press.

Waring, R. The inescapable case for Extensive Reading. http://www.robwaring.org/papers/waring_Nova_2011.pdf

Websites:

The Extensive Reading Foundation:	www.erfoundation.org
The Extensive Reading Pages:	www.extensivereading.net
The Extensive Reading discussion List.	groups.yahoo.com/group/extensivereading/
ER Moodlreader:	www.moodlreader.org
The Japan ER Association (日本多読学会):	www.jera-tadoku.jp
The Korean English Extensive Reading Association;	www.keera.or.kr
The Extensive Reading Bibliography:	www.erfoundation.org/erf/bibliography/
Rob Waring's ER website	www.robwaring.org/er/
SSS Reading Levels and Word Counts	www.seg.co.jp/sss/reading_level/A/index.shtml

[訳注:和書の紹介]

SSS英語学習法研究会, 2005, めざせ100万語! 読書記録手帳, コスモピア

酒井邦秀, 神田みなみ, 2005, 教室で読む英語100万語, 大修館

高瀬敦子, 2010, 英語多読・多聴指導マニュアル, 大修館

古川昭夫, 2010, 英語多読法, 小学館

古川昭夫, 神田みなみ ほか, 2010, 英語多読完全ブックガイド(改訂第3版), コスモピア

訳者より

本冊子は、国際多読教育学会が制作した英語版を、国際多読教育学会の日本人理事である、山中純子、高瀬敦子、古川昭夫が翻訳し、訳註をつけたものです。16ページから19ページは、日本語版発行にあたり、日本で多読指導にあたっている方から寄稿していただきました。
(山中純子、高瀬敦子、古川昭夫)

多読(多聴)の目的・方法・意義

高瀬 敦子

国内外で多読が急速に広まってきていますが、多読はなぜ必要なのか、何のために行うのか考えてみましょう。

最近、大学生の英語力低下が大きな問題になっていますが、原因は英語教育が言語教育ではなく入試対策、またはTOEIC対策授業となっていることにあるでしょう。ぶつ切りの英語・不自然な英語・使えない文法・文脈のない語彙・音のない英語等を学習し、読むのは英語を日本語に訳し、その日本語で内容理解をする。このような学習法を行ってきた学生が大半です。これでは英語嫌い・英語アレルギーが増え、英語の運用能力が全くない(読めない・書けない・聴けない・話せない・発音できない)学生が増えるのも仕方ないことです。

このような状態から脱却するには多読・多聴を行う必要があります。多読・多聴の目的は、流暢に読み聴きができるような英語運用能力向上を目指すことです。それを効果的に行うには、次のようなことが大切となります。

1. 小学校英語では、絵本の読み聞かせを毎回行い、自然に使われている英語を耳からたくさんインプットする。読み聞かせしながら、徐々に音と文字とを結びつけさせる。自分でも読めるようになると、喜んで読書を始める。
2. 中学では、毎週定期的に時間を取り、できるだけ回数を多く多読と多聴を行わせる。目に頼り始めると、耳の発達がおろそかになる恐れがあるので、必ず授業内で毎回一定時間を多聴に充てる。また、多読の時間は一斉に時間を計って読ませれば集中力が付く。
3. 高校で多読をスタートする場合は、必ず1年生から始める。大学入試勉強を始める前に多読に慣れ、ある程度の量を読めば、入試勉強(特に長文)が楽になる。
4. 大学で多読を開始する場合は、入試勉強の訳読の癖を取り除くために、かなり難易度の低い本を大量に読ませる。徐々にレベルを上げ、長い本に移行する。

全体的に言える大切なことは、不自然な音声の癖がつく前に耳から大量に自然な英語をインプットし、訳読の癖がつく前に、英語の本を訳さずにそのまま読む習慣を付けることです。また、高校生でも大学生でも、楽に読める程度の英語の本を大量に読むことで、基礎力が強化され、語彙・フレーズ・語順・基本文形等の自動認識が行われるようになり、読書スピードが上がり、レベルアップもスムーズに行われるようになります。

全国で小学校から多読・多聴が始まり、中・高・大と続けていけば、ペーパーバックを楽しむ高校生、専門書を原書で読む大学生が多く出現することでしょう。一番大切なことは、楽しく読むことです。楽しくなければ持続できないし、身につかないので、楽しい英語の読書をしましょう。

(近畿大学講師、日本多読学会会長、国際多読教育学会理事)

多読授業へのアドバイス(大学、短大、専門学校)

山中 純子

できるだけ多くの学生が、英文読書を好きになり、多読に成功するには、教師側の工夫、努力、しかけが必要です。専門学校と大学で20年以上にわたってさまざまなレベルの学生に多読指導を行った経験から、気付いたことを述べます。

1. 自分のスイートスポット(ガイドブックp. 3-4)を、しっかりわからせる。そのためには最初のクラスにいろいろなレベルのgraded readers やleveled readers のサンプルを持って行き、読ませてみる。「これは読みやすい!」「これなら楽しく読める!」という実感を持たせる。(大学生でも、leveled readers は必要)
2. 教室内多読の時間をできるだけ確保する。毎が無理なら、学期の最初だけでも。学生が適切な本を自分で選べるようになるまで、指導が必要。
3. 面白い本を選ぶことが最重要。面白ければ、読む気が起こり、次にまた読みたくなる。つまらない本は、読むのをやめるように指導する。本選びの成功が、多読の成功。本の情報は、口コミが一番。学生同士の情報の交換を促進する。
4. 多読の効果を、繰り返し語り、「効果が表れてくるのが楽しみです」と、たえず言い続ける。変化や効果が見えたら、それをクラスに伝え、喜びを共有する。
5. 語数を記録させるのが、わかりやすく効果的。リーダーの裏表紙に語数が載っている。なければ、教師が「英語多読完全ブックガイド」(コスモピア)や、ウェブサイト(p.15)などで調べ、語数記録をサポートする。
6. 1分間に約100語(以上)読めるものを選ばせる。1日10分読むと、1,000語読める。6日間で6,000語。それを15週間繰り返せば、一学期で9万語。1日15分なら、13.5万語。20分なら、18万語。一学期の目標を何万語かに決め、そのためには一日何分読むことになるか計算させる。目標はやや高め、かつ、現実的に。
7. 「隙間時間」(10分から)を見つけて読み、そして「毎日」読むことを習慣化させる。
8. 教師も、同じ目標語数(またはそれ以上)を読むことをお勧めする。教師が多読を楽しむ姿は、何よりのお手本である。学生と同じ記録用紙を用いるのもよい。面白い本の情報を学生と交換する。
9. 何万語(何冊、何ページ)読んだ頃どんな変化が表れてきたか、学生に記録、報告させる。その情報をクラスで共有する。
10. 一人一人の学生が、これまでに何冊、何語、または何ページ読んだか、楽しく読めているか、などをたえず把握し、適切な指導をする。そのためのシステムを作る。(毎週「一行報告」を出させる、などもよい)学期の半ばまで一冊も読んでいない学生がいるのに、教師が気付いていなかった、ということのないように。

(愛知学院大学・中京大学 非常勤講師、国際多読教育学会理事)

塾における多読指導 古川 昭夫

(生徒数) 約1000名 (対象) 中1～高3
(蔵書数) 約40万冊 (期間) 2003年～現在

塾や個人英語教室の場合、採算が合う規模の生徒を集め、その生徒が継続して通ってくれなければ、多読指導も絵に描いた餅に過ぎない。従って、塾で多読指導をする場合、

- 1) 受講生が面白がり、多読にはまる
- 2) 学校の成績が上がる、英検に合格する
- 3) 受験に合格する

などの具体的な成果を出すことが必要である。幸い、英語が苦手だったのに、半年でHarry Potterが読めるようになった中2生、中1から始めて2年半でTOEIC850点をとった中3生、中2から多読を続けて無事東大に合格した卒業生などの実績のお陰で、現在では、持続可能な経営が可能な規模の生徒数が集まるようになった。

10年前、私が、多読を英語の授業の柱にしようと提案しても、数学教師の私が趣味と研究を兼ねて始めた多読に対して、当時の英語科の教師は懐疑的で、多読をとりいれてもよいという教師は1名のみだった。

そのため、2003年、多読図書を1万冊購入し、多読教室を1つ作り、生徒数65名という小規模で通年の多読のみのクラスをスタートし、多読教師の発掘・育成、各種データの収集、広範な多読図書の収集を開始した。

2006年より、外国人講師による文法・会話・作文指導と、日本人講師による多読指導を80分づつのセットとした中1多読クラス開講し、2011年現在では、中1～高3まで109クラスの多読クラスを開講し、19の多読専用教室を設置するところまで成長した。

私達が気をつけていることは、

1. 速読競争にさせず、やさしい本をじっくり読ませる。
そのために、易しい本を大量に用意する。
2. 生徒に選書を任せず、生徒の読めるレベルの本を、生徒の嗜好にあわせて、講師が選書する。そのために、講師もやさしい本を多読する。
3. 読後に内容確認試験はせず、講師が生徒との対話で楽しんだかの確認をし、それを次の選書に活かす。
4. 本の朗読CDをできるだけ用意し、「読む」、「聞く」、「聞きながら読む」を選択できるようにする。
5. 定期的に試験で英語力をモニターし、各生徒に、多読に限らず、英語の学習の仕方をアドバイスする
6. 生徒の興味に合わせて、GRに限らず、幅広い洋書を用意する。
7. 多読の効果を、受講生と卒業生の実績で示すこと

である。

より詳しくは、<http://www.seg.co.jp/tadoku/>を参照されたい。
(SEG多読教室、SSS英語多読研究会、国際多読教育学会)

児童からの多読 宮下いづみ

(生徒数) 約74名 (対象) 中1～高3
(蔵書数) 約2万冊 (期間) 1993年～現在

英語多読の導入によって、明らかに生徒たちが英語に接する時間が増えました。英語を聞いて、マネして繰り返して、読んでみると、「英語はわかる」という気持ちになってくるようです。宿題で本読みをすることで、家族の輪が広がり、最近ではおばあさま、おじいさまの世代まで一緒になって楽しんでいる姿がみうけられます。読書が習慣化すると、お勉強というよりは楽しい活動の一貫として、自然に生活の中に英語を取り入れることができます。

EETは、小学生から大人まで幅広い生徒が、気軽に通う地域密着型の英語教室です。シール貼りや本の整理などをスタッフの代わりに、生徒がはたしてくれています。また上級生を見て下級生が目標を持てたり、学年をへだてて共通の話題があり交流できます。

プログラムを立ち上げるときには、保護者会で絵本の楽しさや読み方の説明を行いました。また生徒たちには成功して活躍している先輩の話を紹介したり、直接先輩を招きアドバイスをしてもらい向上心を高めてもらっています。

実際の授業の中での流れです：

1. 授業時間の中での多読時間を設定します。小学生クラスについては、最大で30分(75分授業の内)をあてています。
2. 選書は講師がイニシアティブを取って決めつつも、ある程度生徒が選ぶ自由を認めながら進めていきます。
3. 宿題で多読します。忙しさに合わせて本の長さは調整していきます。
4. 多読記録を取ります。(日付、冊数、タイトル、語数、感想＝具体的に内容について書きます。)
5. 定期的に本を入れかえます。新刊本も足していきます。

幼児や児童に対しての多読指導の場合には、あまりはつきりと多読とそれ以外の活動をわけないで行います。歌って、踊って、読み聞かせをして、ゲームをしてという流れにのりながら、はじめは読んだり歌ったりした本を多読手帳を記録することで、「多読をはじめた」という意識をしていきます。

生徒どうしで本のコメントを交換し、次に読む本を決めていくのも楽しいようですが、講師はできるだけたくさんシリーズや本を知ること、適切な本をすすめられるように日々情報をよく集めておくのと有益です。小学生には、動物の登場する話し(動きがおもしろい)や、シリーズもの(人物が把握しやすい)などが人気があります。

卒業生たちが、自分に自信を持ち、どんな世の中でも、力強く生き抜く力を培ってほしいと願っております。

(Eunice English Tutorial主宰)

中学・高校における多読指導 安福 勝人

(生徒数) 350名 (対象) SEコース中1～高3
(蔵書数) 25000冊 (期間) 2007年～現在

生徒が英文を読む際に、日本語訳が常に付属として付いてくる英語教育の環境下でどれだけ英語学習を進めても、英語で英語を理解するという本来の学習目的を達成することは極めて困難である。そもそも多読プログラムを始める切っ掛けとなった理由は、教える英語から生徒自らが楽しんで英語を学ぶという環境を構築するためであった。

2007年に本校ではSuper English course(SEコース)という英語を特化したコースが立ち上げられ、多読プログラムを推進することとなった。当初中学1年生にどのようなレベルの英語が読めるのかという懸念があったが、ALTによる読み聞かせとPhonics学習を1ヶ月間実施し、ゴールデンウィーク後に多読を開始すると、ORTの読みと内容理解が不思議なほどできていたことには驚くしかなかった。

多読を進めるに当たって常に注意を払ってきた点が、生徒個々の英語のレベルを正確に把握するという点である。毎日実施される読書タイムの時間に、個人の英語レベルを超えた本を読んでいないかどうかを見て回り、もし力以上の英語を読んでいけば、その生徒のレベルに合った多読本を紹介するようにしてきた。

幸い英検の結果を見る限り、中学3年を終了する時までには、SEコース全員が準2級を取得し、更に2級を取得する者も毎年10名程出るようになってきた。この結果はひとえに英語を英語で直接理解するという実践があったことに他ならない。

SEコースの各クラスには1000冊程の多読本を常備し、いつでも読書可能な状態にしてある。更に図書館には多読コーナーを設置することにより、音源を含めて貸出ができるようになってきている。英語に触れない日がないというのが英語教育の目標の一つでもある。

多読プログラムがただ単に読むことだけに終始するのではなく、多書プログラムに結び付ける実践も本校では進めてきた。授業中の10分間を利用して、教師側が与えたテーマに沿って生徒たちは、ひたすら英文を書くのである。但し以下の3項目を守らなくてはならない。

1. 消しゴムは使わない
2. 辞書は使わない
3. 鉛筆を止めずにひたすら書き続ける

中学3年時での実践ではあるが、それまでの2年間に多読を継続することにより、かなりの英文が書けることを発見できた。「読む」「書く」「聴く」「話す」という言語活動の基本要素を如何に結び付けていくかが今後の多読プログラムにおける課題と言ってよいだろう。

(武庫川女子大学附属中学校高等学校 英語科教諭)

中・高校生への多読指導 鬼丸 晴美

(生徒数) 約2000名 (対象) 中1～高1
(蔵書数) 約2万冊 (期間) 2008年～現在

初年度は、中学1年生からスタート。当初は英語授業の10分間×5日を多読としたが、2学期からは準備片付時間のロス、語数の多い本を読みきる達成感など生徒たちの多読への興味維持を考慮して、週1回50分間に変更。教室にて多読を実施。使用図書、準備、片付け、読書の記録、書籍のブックコート、単語数の記入などは授業支援として図書館がすべてを担う。生徒の読書記録は貸出記録として蓄積し多読賞状の作成も手がける。多読導入は中学1年生だけに留まらず高校全学年にまで広がり週当たり90コマの月もあった。年間の洋書貸出数は25万冊を記録。

2年目は中1・中2の多読授業優先で時間割を組み1週間1回多読が定着する。多読基本図書としてORT1～5を授業専用10セット、貸出用4セットを準備。Stage毎に分かりやすいようにラベルを貼付したり6冊毎束ねたりORT専用の記録用紙を作成したりと生徒が迷わず読み進められるように工夫。多聴授業を手軽に始められるよう多聴図書、CDプレイヤーの準備、図書館での実施計画を練り、2学期に中学2年生から多聴を始める。中学2年生で100万語を超える生徒が出る。洋書貸出数は16万冊を超える。中学生全員英検受験実施となる。

3年目の多読授業は中学1年生から高校1年生までの4年間を週1回多読授業実施と決定。授業内容として中学1年生はORT1～5、One Hundred、Rookie Readerの多読を教室で実施。中学2年生から3年生はORT、GR、LRの多聴を図書館で実施。高校1年生は教室で多読を実施。どのクラスもDictationを多聴授業の中で1回実施。CDプレイヤーの台数を増やし、3学期から中学1年生も図書館で多聴実施。授業以外でも多読多聴をする生徒が定着し年間貸出数は17万冊を超える。

4年目の多読授業は中学1年生から高校1年生まで32クラスが図書館で多聴実施。生徒個人貸出記録のデータに語数をリンクさせるシステムの構築により、全生徒の積算語数を算出できるようになった。授業担当教諭は単語数の管理業務から解放。また、生徒も積算語数をチェックできることによるモチベーション向上は顕著である。全校生徒の月毎語数、英検結果、WPMを相関させ、全教員共有データとしている。多読賞状から語数達成賞状へと変更。多読学会の中村麻里先生発案スピーカーフォンを自校作成し、2学期後半からShadowingを導入。WPMの計測およびDictationも実施。

1・2学期の洋書貸出は約14万冊。中1多読導入期から多聴を始めたことで英語を耳にすることが自然にでき、Sight Wordが増え文字に対する抵抗感の軽減がみられる。そのため夏休み・冬休みの読書量が過去3年間と内容に大きな違いが見られる。中1には英検準2以上、100万語間近の生徒がいる。持続可能な読書活動への取組み本校の大きな特徴といえる。

(明星中学高等学校 教諭)

公立高校における多読指導 宮本 恵理子

(生徒数) 279名 (対象) 高1
(蔵書数) 約300冊 (期間) 2011年4月～現在

5年前に勤務した総合学科では、ボーリング、社交ダンス、ガラス工芸などおもしろい授業が多い中で、英語は生徒にとっては魅力もなく興味もわかない科目だった。英語のおもしろさも感じてほしいと3人の教師で多読を始めた。学校に多読図書はなかったので、日本多読学会からORT 1～4 (12セット)をお借りした。その後、学校の図書館で多読図書を少しずつ購入してもらったが、それだけでは足りず、学会からもお借りした。

2年後、生徒の8割が大学へ進学する普通科に転勤した。また、ゼロからのスタートである。最初の2年間は授業の5～10分間や夏期講習等で多読を行ってきた。多読図書は学会からお借りしたり、学校の図書館でORT 1～9、FRL 1～7 (各1冊)を購入してもらった。今年(2011)から、英語Iの授業で1年生全員を対象に各クラス週1回1時間を多読授業とし、3人の教員で行っている。ポータブルCDプレーヤー40台を買う予算がなかったので、苦肉の策としてコンピュータ教室を使用している。多読図書は1学期の間、学会の貸出図書ORT 1～5 (各4セット)を利用した。このセットで1クラス40人の多読多読授業が可能である。また、学校の図書館でWolf Hill (各1冊)を購入してもらい、現在はORT、Wolf Hill、FRLと学会からの貸出図書で授業を行っている。

私達が気をつけていることは次の3点。

1. やさしい本から朗読CDで聴き読みし、和訳しないで英語で理解することに慣れさせる。
2. 読後に内容確認試験はせず、読後感想を生徒と交わり、楽しんだかなどを確認し、次の選書に活かす。
3. 毎週、読書記録を点検し、コメントを添えて、次週の選書に活かす。そのために、教師もやさしい本を多読する。

公立高校の場合、学校によって生徒の英語の力も様々であり、教師は転勤の度に多読図書ゼロからのスタートをくり返す。しかし、どんな学校でも多読は有効である。多読は、生徒それぞれの力にあった本を読むので、能力の高い生徒はさらに力をつけ、また、英語が不得意の生徒はやさしい絵本を読むことで楽しく基礎から学び直すことができる。「自分の力で読める英語の本があることを知って嬉しかった」「日本語に直さず英語で理解できるようになった」「絵本の聴き読みは楽しい」と、生徒は多読授業を大変楽しみにしている。中には、朝多読にも参加し、4月から12月までで15万語を超えた生徒もいる。公立高校での多読は、学会からの貸出図書の利用、図書館での多読図書購入、授業での5分間読み、朝多読、コンピュータ教室の利用など、「できるところからとりあえず始めてみる」ことをお勧めしたい。

(神奈川県立港北高等学校 英語科・総括教諭)

高専における多読指導 西澤 一

(学生数) 約600名 (対象) 高専1(高1)～高専7(大4)
(蔵書数) 約3万冊 (期間) 2002年～現在

技術者が直接英語を使う必要性は高まっているが、高専を含め工学系学生は英語に強い苦手意識を持っていた。これを克服し学生の英語運用能力を向上するには、語彙・文法等、知識獲得のみに終始せず、英語運用体験を積ませる必要があった。幸い、大学受験に拘束されない高専では、長期的な効果を確認しながら、新しい手法を教育実践することが可能であった。多読授業を4年以上継続した高学年学生は、TOEIC平均点が同年代の英語専攻の大学生平均並み以上に向上しており、累積読書量約300万語の学生は、英語圏留学1年経験者平均と同等の得点を得ている。

本校では、吉岡准教授が2002年に5年生の「電気英語」で多読授業を始めた。英語学習を忌避してきた学生にも好評で、衝撃を受けた記憶がある。そこで、2004年度には、卒業生の達成度を問われるJABEE認定(外部評価)対策として「電気英語」を6単位に増して2年生以上に配置、多読授業を6年継続できる体制を整えた。週1回45分の通年授業(30週)は、3千冊の図書を配備した図書館で行い、多読経験を持つ3名の専門学科教員が担当した。成績評価は、学年毎にレベルと長さを設定した未読英文の読解試験を中心に、外部試験の得点も加味して行った。

2008年度には、多読授業が教育GP事業に採択され、英語科教員が担当する全学科共通の英語でも週45分の授業時間を多読・多聴活動に充てる実践を開始、全5学科の学生が最小2年間の多読授業を受講できる体制になっている。

私達が気をつけていることは、

1. 長期継続プログラムを前提に、成績は学年毎に設定した達成度を定期試験等で評価する。読書量での評価はなるべく避け、各本の読後内容確認等は、しない。
2. ただし、1年目はOxford Reading Tree等の絵本で、和訳しない読み方に慣れさせることを優先する。
3. 授業でコアとなる読書時間(週45分)を確保し、課外の読書用に図書館蔵書の貸出しを推奨する。
4. 低学年学生には朗読CDを用いた聴き読みを勧める。
5. 読書記録手帳を定期点検し、各学生の履歴に合わせた選書指導を行う。このために、担当教員もやさしい本を多読し、読後感想を学生と交わせるようにする。
6. 多読用図書は、Graded Readers、英語圏の子供向け児童書とLeveled Readersを中心に人気作品を収集し、需要の多いタイトルは複数(最大10冊)配備する。
7. 多読の効果をTOEIC等の外部試験で確認することである。より詳しくは、

http://www.ee.toyota-ct.ac.jp/er_english.phpを参照されたい。

(豊田高専電気・電子システム工学科教授)

This guide is supported by



CAMBRIDGE
UNIVERSITY PRESS

www.cambridgejapan.org/



HEINLE
CENGAGE Learning™

www.cengage.jp/top/



MACMILLAN
EDUCATION

www.mlh.co.jp/

OXFORD
UNIVERSITY PRESS

www.oupjapan.co.jp/

PEARSON

www.pearsonkiriara.jp/

The Extensive Reading Foundation

www.erfoundation.org



Follow us on Facebook and the ERF YouTube Channel

© The Extensive Reading Foundation 2011